

Factorial GP 関数の Chevalley 公式

杉本奨吾 (Sugimoto Shogo)

早稲田大学大学院基幹理工学研究科数学応用数理専攻

1 導入

Factorial GP 関数は maximal orthogonal Grassmannian variety の torus 同変 K -theory の Schubert 類を表す特殊関数である. この関数は Ikeda–Naruse[2] らによって導入され, strict partition によって添字づけられる. この論文の中で factorial GP 関数は 4 つの表示-対称群を使った表示 (Hall-Littlewood 型公式), pfaffian の有理式 (Nimmo 型公式), tableaux 表示, diagrams 表示-が与えられた. またこの関数は特殊化すれば Schur の P 関数となる.

Schubert calculus の基本問題の 1 つは構造定数を求めることである. つまり factorial GP 関数の積を factorial GP 関数の 1 次式で表したときの係数を求めることである. 一般の strict partition を添字にもつ GP 関数の構造定数に関してはまだわかっていないが Chevalley 公式という一方を特別な partition つまり one box に制限したときの構造定数は Buch–Chaput–Mihalcea–Perrin[1] らによって与えられた. この公式を紹介する.

2 記号

n を自然数とする. $(x) = (x_1, x_2, \dots, x_n)$, $(b) = (b_1, b_2, \dots)$, β を formal parameter とする. S_n を n 次対称群とする. $R(T) = \mathbb{Z}[e^{\pm t_1}, \dots, e^{\pm t_{n+1}}]$ とおく.

定義 2.1. GT_n を次の条件を満たす多項式 f の集合とする.

- (1) $\mathbb{Z}[\beta][x_1, x_2, \dots, x_n]$ の元
- (2) 変数 x_1, x_2, \dots, x_n で対称
- (3) f に $1 \leq i < j \leq n$ である i, j に対して $x_i = t, x_j = \ominus t (= -\frac{t}{1+\beta t})$ を代入したときこの多項式は t に依存しない.

ここで集合 GT_n は環になっている.

例 1. $\prod_{i=1}^n (1 + \beta x_i)$ は GT_n の元である. (3) の条件は $1 + \beta(\ominus t) = 1 - \frac{\beta t}{1+\beta t} = \frac{1+\beta t - \beta t}{1+\beta t} = (1 + \beta t)^{-1}$ より $(1 + \beta t)$ は打ち消しあうことからわかる. 条件 (1), (2) は明らか.

定義 2.2. 自然数の狭義単調減少列 $\lambda = (\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_\ell)$ (つまり $\lambda_i > \lambda_{i+1}$) を **strict partition** といい ℓ を λ の長さ (**length**) という (また \emptyset は長さ 0 の *strict partition* と考える). 長さ n 以下の *strict partition* の集合を \mathcal{SP}_n とおく. つまり

$$\mathcal{SP}_n = \{\lambda = (\lambda_1 > \lambda_2 > \dots > \lambda_\ell) | \ell \leq n, \lambda_i \in \mathbb{Z}_{>0}\}$$

とおく. また第 1 成分が n 以下である *strict partition* の集合を $\mathcal{SP}(n)$ とおく. つまり

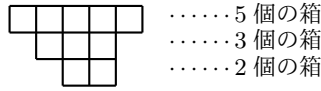
$$\mathcal{SP}(n) = \{\lambda = (\lambda_1 > \lambda_2 > \dots > \lambda_\ell) | \lambda_1 \leq n, \lambda_i \in \mathbb{Z}_{>0}\}$$

とおく.

この2つの集合は $SP(n) \subset SP_n$ という包含関係がある.

strict partition λ は次のように **shifted Young diagram** $\mathbb{D}(\lambda) = \{(i, j) \in \mathbb{Z} \times \mathbb{Z} | i \leq j \leq \lambda_i + i - 1, 1 \leq i \leq \ell(\lambda)\}$ と同一視できる.

例えば $\lambda = (5, 3, 2)$ は次の図形と対応させる.



これは 1 行目に 5 個の箱, 2 行目に 3 個の箱, 3 行目に 2 個の箱を 1 つずらして並べたものである. この partition $\lambda = (5, 3, 2)$ の長さは 3 であるから $\lambda \in SP_3$ であるが $\lambda \notin SP(3)$ である ($\because \lambda_1 = 5 > 3$).

今後はこの同一視で strict partition と shifted young diagram を区別せずに用いる. つまり

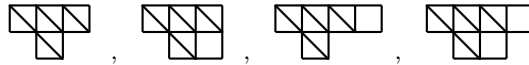
$$SP(3) = \left\{ \emptyset, \square, \square\square, \begin{array}{|c|} \hline \square \\ \hline \square \\ \hline \end{array}, \square\square\square, \begin{array}{|c|} \hline \square \\ \hline \square \\ \hline \square \\ \hline \end{array}, \begin{array}{|c|} \hline \square \\ \hline \square \\ \hline \square \\ \hline \square \\ \hline \end{array}, \begin{array}{|c|} \hline \square \\ \hline \square \\ \hline \square \\ \hline \square \\ \hline \square \\ \hline \end{array} \right\}$$

と同一視する. 一般の $SP_n, SP(n)$ に関しても同様である. この同一視のもとで rook strip を定義する.

定義 2.3. λ, μ を strict partitions とする. $\lambda \subset \mu$ で $\lambda_i \leq \mu_i, (1 \leq i \leq n)$ を表す. $\lambda \subset \mu$ である 2 つの partitions について μ/λ で μ の diagram から λ を除いた diagram を表す. μ/λ が **rook strip** とは同じ行 同じ列には 2 つ以上の箱がないことをいう. 言い換えると μ は λ に各行各列高々 1 個の箱をくっつけて得られる partition である. また λ/λ も (これは \emptyset となる) rook strip に含める.

例 2. $\lambda = (1) = \square$ のとき μ/λ が rook strip となる strict partition μ は $(1) = \square, (2) = \begin{array}{|c|} \hline \square \\ \hline \square \\ \hline \end{array}$ の 2 つである.

$\lambda = (3, 1)$ のとき μ/λ が rook strip となる strict partition となる μ は $(3, 1), (3, 2), (4, 1), (4, 2)$ の 4 つでこれは次のように diagram を描けばわかる. ただし斜線部は $(3, 1)$ を表している.



$R(T) \otimes_{\mathbb{Z}[\beta]} GF_n$ 上に演算 \oplus, \ominus を次で定義する.

$$x \oplus y = x + y + \beta xy, \quad x \ominus y = \frac{x - y}{1 + \beta y}.$$

ここで \oplus は結合法則が満たされ 0 が単位元となり \ominus は \oplus の逆演算である. また $\ominus x = \frac{-x}{1 + \beta x}$ である. $k \in \mathbb{Z}_{>0}$ に対して

$$[x|b]^k = (x \oplus b_1)(x \oplus b_2) \cdots (x \oplus b_k)$$

と定義する. またこれを長さ ℓ の strict partition $\lambda = (\lambda_1, \lambda_2, \dots, \lambda_\ell)$ に拡張して

$$[x|b]^\lambda = \prod_{j=1}^{\ell} [x_j|b]^{\lambda_j}$$

で定義する.

3 Factorial GP 関数とその Chevalley 公式

定義 3.1. [2] $\lambda \in \mathcal{SP}_n, \ell$ を λ の長さとする. 関数 $GP_\lambda(x|b)$ を次で定義する.

$$GP_\lambda(x|b) := \frac{1}{(n-\ell)!} \sum_{w \in S_n} w \left[[x|b]^\lambda \prod_{1 \leq i < j \leq n, i \leq \ell} \frac{x_i \oplus x_j}{x_i \ominus x_j} \right].$$

ここで x は n 変数 x_1, \dots, x_n を S_n は n 次対称群を表し $w \in S_n$ は x の添字に作用する. また $GP_\emptyset(x|b) = 1$ とおく.

定義から Factorial GP 関数は ($\beta = 0, \forall b_i = 0$) 特殊化すれば Schur の P 関数が得られることがわかる.

命題 3.2. [2] $\lambda \in \mathcal{SP}_n$ に対して $GD_\lambda^{(n)}(x|1-e^t) \in R(T) \otimes_{\mathbb{Z}[\beta]} G\Gamma_n$ を

$$GD_\lambda^{(n)}(x|1-e^t) = \begin{cases} GP_\lambda(x_1, x_2, \dots, x_n | 1-e^{t_1}, \dots, 1-e^{t_{n+1}}, 0, \dots) & n : \text{even} \\ GP_\lambda(x_1, x_2, \dots, x_n, 0 | 1-e^{t_1}, \dots, 1-e^{t_{n+1}}, 0, \dots) & n : \text{odd} \end{cases}$$

とおく. このとき $\{GD_\lambda^{(n)}(x|1-e^t) | \lambda \in \mathcal{SP}_n\}$ は $R(T) \otimes_{\mathbb{Z}[\beta]} G\Gamma_n$ の $R(T)$ -basis となる.

$OG(n+1, 2n+2)$ を even orthogonal Grassmannian variety とし, $K_T(OG(n+1, 2n+2))$ を $OG(n+1, 2n+2)$ の torus 同変 K 理論とする. Ω_λ を λ に対する Schubert variety, $\mathcal{O}_{\Omega_\lambda}$ をその構造層とするとこれは $K_T(OG(n+1, 2n+2))$ の元 $[\mathcal{O}_{\Omega_\lambda}]_T$ を定める. さらに $K_T(OG(n+1, 2n+2))$ は $\{[\mathcal{O}_{\Omega_\lambda}]_T | \lambda \in \mathcal{SP}(n)\}$ を $R(T)$ -加群としての基底を持つことが知られていて $K_T(OG(n+1, 2n+2))$ は環構造を持つことから, $\lambda, \mu \in \mathcal{SP}(n)$ に対して

$$[\mathcal{O}_{\Omega_\lambda}]_T [\mathcal{O}_{\Omega_\mu}]_T = \sum_{\nu \in \mathcal{SP}(n)} c_{\lambda, \mu}^\nu [\mathcal{O}_{\Omega_\nu}]_T$$

と展開できることがわかる. Schubert calculus の基本的な問題の 1 つはこの係数 $c_{\lambda, \mu}^\nu$ を求めることである. しかし一般の $\lambda, \mu \in \mathcal{SP}(n)$ に対してこの係数を求めることは難しい. そこで $\mu = (1)$ という特別な partition に制限したときの $c_{\lambda, \mu}^\nu$ を考える. これは Chevalley 公式とよばれ, [1] で与えられている. また $\mu = (\mu_1)$ というもう少し一般の場合は Pieri 公式と呼ばれ, まだ未解決である.

定理 3.3. [2] 次の写像は $R(T)$ -代数として準同型でかつ全射である.

$$\pi_n : R(T) \otimes_{\mathbb{Z}[\beta]} G\Gamma_n \longrightarrow K_T(OG(n+1, 2n+2)) \quad GD_\lambda^{(n)}(x|1-e^t) \mapsto \begin{cases} [\mathcal{O}_{\Omega_\lambda}]_T & \lambda \in \mathcal{SP}(n) \\ 0 & \lambda \notin \mathcal{SP}(n) \end{cases}$$

この対応により $GD_\lambda^{(n)}(x|1-e^t)$ がつまり (偶数変数の) factorial GP 関数が Schubert 類を表す特殊関数であることがわかる.

定理 3.4. [1](Chevalley 公式)

n を偶数, $\lambda \in \mathcal{SP}_n, \ell$ を λ の長さとする. このとき

$$GP_\lambda(x|b) \cdot GP_\square(x|b) = \beta^{-1} \{ \Pi(b_\lambda) - 1 \} GP_\lambda(x|b) + \Pi(b_\lambda) \sum_{\mu/\lambda: r, s, \mu \neq \lambda, \mu \in \mathcal{SP}_n} \beta^{|\mu/\lambda|-1} GP_\mu(x|b)$$

が成り立つ. ここで

$$\Pi(b_\lambda) = \begin{cases} \prod_{i=1}^{\ell} (1 + \beta b_{\lambda_i+1})^{-1} & \ell : \text{even} \\ \left\{ \prod_{i=1}^{\ell} (1 + \beta b_{\lambda_i+1})^{-1} \right\} (1 + \beta b_1)^{-1} & \ell : \text{odd} \end{cases}$$

を表す. また $\mu/\lambda : r, s$ は rook strip を表す (μ は λ に各行各列高々 1 個の箱をくっつけて得られる shifted young diagram).

例 3. $\lambda = \begin{array}{|c|} \hline \square \\ \hline \end{array}$ のとき μ としてとれる partition は $\begin{array}{|c|} \hline \square \\ \hline \end{array}, \begin{array}{|c|c|} \hline \square & \square \\ \hline \end{array}, \begin{array}{|c|c|} \hline \square & \square \\ \hline \end{array}, \begin{array}{|c|c|} \hline \square & \square \\ \hline \end{array}$ の 4 通りであった. これより

$$GP_{\begin{array}{|c|} \hline \square \\ \hline \end{array}}(x|b) \cdot GP_\square(x|b) = \beta^{-1} (\Pi(b_{\begin{array}{|c|} \hline \square \\ \hline \end{array}}) - 1) GP_{\begin{array}{|c|} \hline \square \\ \hline \end{array}}(x|b) + \Pi(b_{\begin{array}{|c|} \hline \square \\ \hline \end{array}}) (GP_{\begin{array}{|c|c|} \hline \square & \square \\ \hline \end{array}}(x|b) + GP_{\begin{array}{|c|c|} \hline \square & \square \\ \hline \end{array}}(x|b) + \beta GP_{\begin{array}{|c|c|} \hline \square & \square \\ \hline \end{array}}(x|b))$$

である. ここで $\ell(\lambda) = 2$ より $\Pi(b_{\begin{array}{|c|} \hline \square \\ \hline \end{array}}) = (1 + \beta b_4)(1 + \beta b_2)$ である.

References

- [1] Anders S. Buch, Pierre-Emmanuel Chaput, Leonardo C. Mihalcea and Nicolas Perrin, A Chevalley formula for the equivariant quantum K-theory of cominuscule varieties, *Algebraic Geometry* 5 (5) (2018) 568-595
- [2] Takeshi Ikeda and Hiroshi Naruse, K-theoretic analogues of factorial Schur P- and Q-functions, *Advances in Mathematics* 243 (2013) 22-66